

評論文学習に言語・身体で表現する演劇を活用し、「主体的な学び」や「協働」の姿勢を身につける

高校の現代文の柱の一つといえる評論文を、生徒がもっと好奇心をもって主体的に学ぶことはできないものか。その思いから出発し、外部人材とも連携することで実現させた授業の一連の取り組みをご紹介します。

取材・文／松井大助
撮影／村田わか



国語
佐々木 宏先生

1961年生まれ。映画の助監督やAD、予備校勤務などを経て、29歳の時に都立高校教員に。演劇部顧問で、公立・私立関係なく都の高校生の演劇部員が集まる合宿では、生徒たちの創作活動をサポート。普段の授業におけるアクティブラーニングの活用にも積極的に取り組む。

評論文の筆者の一生を ワークショップで演劇に

ぐるりと輪に並べた椅子に、生徒および外部講師が着席すると、佐々木先生はまずこの授業のねらいを説明した。

「今日から4回、演劇を取り入れたワークショップを行います。そこで目指すのは、

まず1つ目は、授業で勉強してきた評論文の筆者に関心をもつことです。

2つ目は、チームの活動においてそのチームに貢献することです。自分の考えを伝えたり、わからない点を質問したり、うまくできないところで助けを求めたり、いろいろな貢献の仕方があるよね。

3つ目は、正解のない課題にチームで取り組むこと。そのなかでメンバーや自分のいいところにも気づいてほしいです。

最後にもう一つ、外部の大人とかかわり合いながら学ぶことも楽しんでください」日野台高校の2年生は、3学期の国語の授業で、丸山真男の評論文「『である』ことと『する』こと」を学習してきた。これから行うワークショップでは、生徒がチームで丸山真男の一生を物語化、演劇にして発表することにチャレンジする。講師は劇団「青年団」の俳優や演出家。佐々木先生と打ち合わせを重ねてきたメンバーだ。

冒頭の説明を終えると、佐々木先生は進行を講師にバトンタッチ。講師は自己紹介を終えると、コミュニケーションを取りやすい雰囲気にするためのゲーム、いわゆるアイスブレイクから授業を始めた



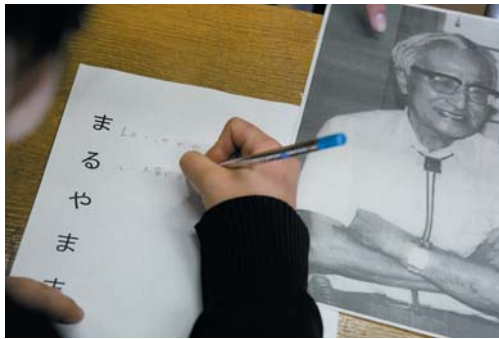
全員でのアイスブレイク、チームに分かれての話し合いと、場面に応じて生徒は椅子を持って移動。教室の空間を柔軟に活用していった。

(45ページの表を参照)

では、評論文にふれたとはいえず、生徒にとって身近ではない丸山真男の一生をどう創作するのか。生徒たちがチームでまづ行っただのは、本人の写真からイメージをふくらませる丸山真男のあいうえお作文だ。講師陣が一例を示して「自由に捏造しちゃおう」と発破をかけると、生徒たちも思い思いの丸山真男像を創作した。

2回目に行っただのは年表作り。丸山真男が生きた時代について、当時のできごとや流行、本人に起きたことを掲載した年表を各チームに配付。その情報を参考に丸山真男の創作エピソードを考えた。

この2回の授業で生徒たちの課題も浮き彫りになる。生徒たちはまず様子見し、誰かがやって勝手がわかると、そこに合わせる。講師陣からあがった「歩踏み出すのを恐れている」という感想は、佐々



「ま」っちゃんが飲めない、「ル」イヴイトンよりグッチ、「や」さしいよ、などと各チームがそれぞれの丸山真男像を考えた。

1917年～1927年/4歳～13歳	
世の中	丸山真男
<p>1917年 4歳 父の転勤で東京から大阪へ移る。</p> <p>1918年 5歳 父の転勤で大阪から京都へ移る。</p> <p>1919年 6歳 父の転勤で京都から神戸へ移る。</p> <p>1920年 7歳 父の転勤で神戸から東京へ移る。</p> <p>1921年 8歳 父の転勤で東京から大阪へ移る。</p> <p>1922年 9歳 父の転勤で大阪から京都へ移る。</p> <p>1923年 10歳 父の転勤で京都から神戸へ移る。</p> <p>1924年 11歳 父の転勤で神戸から東京へ移る。</p> <p>1925年 12歳 父の転勤で東京から大阪へ移る。</p> <p>1926年 13歳 父の転勤で大阪から京都へ移る。</p> <p>1927年 14歳 父の転勤で京都から神戸へ移る。</p>	<p>1917年 4歳 父の転勤で東京から大阪へ移る。</p> <p>1918年 5歳 父の転勤で大阪から京都へ移る。</p> <p>1919年 6歳 父の転勤で京都から神戸へ移る。</p> <p>1920年 7歳 父の転勤で神戸から東京へ移る。</p> <p>1921年 8歳 父の転勤で東京から大阪へ移る。</p> <p>1922年 9歳 父の転勤で大阪から京都へ移る。</p> <p>1923年 10歳 父の転勤で京都から神戸へ移る。</p> <p>1924年 11歳 父の転勤で神戸から東京へ移る。</p> <p>1925年 12歳 父の転勤で東京から大阪へ移る。</p> <p>1926年 13歳 父の転勤で大阪から京都へ移る。</p> <p>1927年 14歳 父の転勤で京都から神戸へ移る。</p>

年表の情報を参考に、「バスガールに初恋」「夫婦で美空ひばりのコンサートに」などと丸山真男の架空のエピソードを創作。



普段の授業では、手元のワークシートの空欄について生徒がグループで話し合い、まとまった考えをグループの代表が板書していく。

丸山真男「『である』ことと『する』こと」評論文の授業の展開

準備段階	ワークショップの2カ月前から外部講師陣と内容を4回打ち合わせる。うちWS全体の予行を1回実施。
ワーク前の通常授業	7コマの授業を実施。筆者の主張を文章の構造に沿って読み取ることをねらいとする。授業の流れは、①ペアで音読②レクチャー③個人ワーク④グループワーク⑤全体確認⑥グループワーク⑦発表。ノートなしで文章の構成図と発展問題を載せたワークシートを使用。生徒は、グループで話し合い黒板の構成図の空所を埋める。全体で文章構成を確認し、次に発展問題をグループで話し合って発表するという授業スタイル。
ワークショップ (WS)	4コマを使い、外部講師の協力のもと、丸山真男の一生をフィクションで創作するという授業を実施。 第1回：アイスブレイク (じゃんけん・ジェスチャーゲーム)、丸山真男であいうえお作文 第2回：アイスブレイク (50数える)、チームで丸山真男の年表作り (創作)、発表 第3回：アイスブレイク (異性とじゃんけん)、チームで各年代の丸山真男の演劇シーン作り、中間発表 第4回：チームで各年代の丸山真男の演劇シーン作り (評論文の一文をセリフに入れる追加条件)、発表
ワーク後の通常授業	2コマの授業を実施。丸山真男への親近感とグループワークへの意欲の高まりを生かし、「日本近代の宿命的な混乱」の背景 (本文に書かれていない) についてグループで自由に考察し、発表し合いクラスで共有。社会のあり方や、よりよい社会を作っていく可能性について、生徒が考えるきっかけにする。

東京・都立 日野台高校



School Data

普通科/1979年創立
生徒数 (2013年度) 914人 (男子 478人・女子 436人)
進路状況 (2013年度実績)
大学 76.9%・短大 1.9%・専門学校 3.1%
就職 0.9%・予備校その他 17.2%
東京都日野市大坂上四丁目16番地の1
TEL 042-582-2511
URL <http://www.hinodai-h.metro.tokyo.jp/>

Outline

東京都の多摩地域南部に位置。「叡智・情操・健康」を教育目標に掲げ、生徒が学習にも行事や部活動にも全力で取り組むという高いレベルでの文武両道を目指している。2010年度より都の指定する進学指導推進校に。2013年度より海外帰国生徒の受け入れ校にもなった。毎年、秋の常盤木 (ときわぎ) 祭では、柔剣道場が劇場になり、3年生全クラスの演劇が2日間にわたって上演されている。

木先生も日頃抱いていた思いだった。

そこで、2回目と3回目のあいだに生徒に記入してもらおう「ふり返しシート」の中身を修正。「ワークは自分から動いた」「誰かがやるのに合わせた」など、自分のかわり方をふり返る設問も入れた。

3回目。生徒たちはこれまでの創作も活用して、「〇歳 そのころ 真男は」というお題のもとにチームで演劇シーンを作り、みずから出演者となって発表した。

4回目は、そのシーンのなかに「『である』ことと『する』こと」の一文、例えば「既に明治年末に漱石が鋭く見抜いていた」をセリフとして盛り込む新たなハードルが。生徒たちは案外この作業を楽しみ、最後の発表では笑いやどよめき此起彼伏の演劇を披露した。ある生徒が話し合いをリードしたり、普段は話さない生徒が「私はどうすればいい？」と自分から尋ねたりと、通常の授業では見られなかった一面

も顔をのぞかせた！

発表した丸山真男の一生はフィクションではある。だがその活動を通して、生徒は丸山真男の年表や当時の時代背景にふれ、彼の書いた一文とも格闘した。生徒からは「丸山真男に親しみが湧いた」という声もあがり、まさにそれは、このワークでねらったことの二つでもあった。

普段の授業でも生徒が

正解のない課題を話し合う

ワークショップを終えたいよいよこの単元の仕上げに入る。佐々木先生は、もともと通常の授業にもグループワークを取り入れてきた。生徒同士で、ワークシートの空欄に何が入るか話し合ったり、教科書内容に沿った明確な答えがないテーマを自由に議論したりする形式でだ。生徒たちは改めてその授業にのぞみ、

最後は、「丸山真男の言う『日本近代の宿命的な混乱』の背景にあるものは」というお話を話し合った。佐々木先生が期待したのは、演劇で二歩踏み出す体験をし、丸山真男への親近感も増した生徒たちがよりアクティブな議論をしていくこと。

結果はといえば、生徒たちは「『する』論理に基づく制度や組織を西洋から移入したのはエリートたち。一般の国民はそれまでの『である』論理で生活していたので、それが生じたのでは？」などと佐々木先生の想定を超える意見を出していった。聴く側の生徒たちも耳を傾け、演劇の時と同じように、発表に対してどよめきや感嘆の声があがったという。

ただ、こうした二連の取り組みで評論文への関心を高めても、このジャンルを「難しい」と感じる生徒はなお多い。佐々木先生は、それ自体は問題ないと考えて

いる。むしろ、その難しくてよくわからないもの、いわゆる「自分の世界にない言葉や考え方」を頭に入れることを楽しめるようになってほしいのだという。わからないことを主体的に学ぼうとする姿勢があつてこそ、社会に出た時に「狭い蛸壺の世界に陥らず、理解の枠組みを広げていくことができる」と思うからだ。



HINT & TIPS

1 体を動かす授業で思考や感情を刺激し、 一歩前に踏み出すきっかけにもする

音読、ロールプレイング、演劇のワークなど、佐々木先生は、読み書きだけでなく、聴くこと話すこと、体を動かすことも授業で重視している。全身を使ったほうが、生徒の思考や感情も動くのを見てきたからだ。身体表現を恥ずかしがる生徒もいるが、そこにみんなで挑むことで思い切りの良さも生まれる。

2 どんな根拠からどのように読めたか 多様なものの見方を議論して共有する

小説でも評論文でも、佐々木先生は、一般的な読み方とは違って、「だからこう読めた」という根拠さえあれば、生徒が多様な読み方を示してくれることを大歓迎。その多様な読み方をみんなともシェアしておもしろがり、読むことの楽しさをまずは共有する。そのうえで、教科書的な読み方もレクチャーする。

3 授業最後のアンケートや話し合いで、 生徒に自分の行動の振り返りを促す

授業で学びたいことを事前に示しておき、授業の最後に、ぬらい通りの学びができたか、生徒が振り返りシートを確認する、というのが佐々木先生の授業の定番。振り返りシートで生徒に自分たちの課題を考えてもらうこともある。演劇のワークでは、4回目の最後にグループで話し合っ振り返りをする時間も取った。

4 教科内容に沿った外部との連携で 異なる世界の人との協働を体験する

講演会などのイベントで外部講師を招くのではなく、佐々木先生は、普段の授業のなかで外部と連携することを目指している。教員以外の大人の授業への参加は、生徒にとっても良い刺激になり、アーティスト同士のコミュニケーションのうまさなど、異なる世界の人とかかわり合うなかで学べることも大きいからだ。

授業ができるまで

読むことや表現することの おもしろさを伝えたい

佐々木先生は、高校生のころから教師になりたかったが、学校以外の世界も知りたくて、大学ではまず日本史を学んだ。

「世の中を変えたい、日本を変えたい、と思っていたんです(笑)。そのためには日本の歴史を知らなければいけない、と」

大学では自主映画の制作にも熱中し、3年生の夏にはついに中途退学、助監督や脚本制作、アルバイトをして暮らす。そして20代半ばに改めて教師になろうと

決意し、通信制大学に編入した。この時に専攻したのは文学。ドフトエフスキーの小説や、会社資金を横領して好きな人に貢ぐニュースなどにふれるなかで、

「世の中のしくみを理解できても人間は正しい道を選ぶとは限らない。人間についてもっと知りたい、と思ったんです」

在学中には予備校での小論文添削や講師も経験し、29歳で高校教員になった。

先生になってからの授業スタイルは、小説については、昔も今も共通している。作者の意図や時代背景をただ教えるのではなく、まずは生徒が個人ワークで自由に考え、グループでディスカッションもして、多様な読み方をみんなで共有する。二つの小説をどれだけおもしろく読める



ジェスチャーだけで何を表現しているかを当てるゲーム。当ててほしくて動作が大きくなるほど、個々の表情も生き生きとしたものに。

かをやりたいんです。生徒が読む楽しさを実感すれば、また小説を読もうとするきっかけになると思うからです」

また、若手時代に荒れた高校を経験し、教え方を模索するなかで、ロールプレイングによる国語表現など、身体活動を伴う学習も実践、手ごたえをつかんでいく。

「やるべきことのタスクがはつきりしているので生徒が授業に参加しやすいです。体を動かすと、その生徒の思考や感情も動く、ということも見てとれました」

自分が教えるスタイルより 生徒主体の学習を志向

一方、評論文については、以前は、佐々木先生が読み方をしっかりとレクチャーしていた。けれども、生徒が能動的に学ぶアクティブラーニングのことを知ったのを



村井まどかさん(右から2番目)ほか講師陣。毎回、ワークショップのあとに、佐々木先生と、今回の授業の振り返りも行ってた。

機に、評論文でも生徒主体で授業を進められないか考えるようになる。

手始めに、評論文の授業で自分は何をしていたかを振り返った。力を入れていたのは、文章構成をかみ砕いて説明することと、抽象的な内容を生徒にとって身近な話題につなげること。さて、これを生徒自身の手でできないものか？

そのなかで編み出したのが、ワークシートの文章構成図の空欄や発展問題をグループで話し合う形式。また、アーティストと授業を作る10回の研修に参加し、そこで劇団「青年団」の村井まどかさんと出会えたことで実現したのが、演劇のワークショップだった。村井さんは、高校生のころは評論文の授業が苦手だったそう。だからこそ評論文学習を楽しめるワークを考えたい、という、佐々木先生の思いと共通する構想をもっていたのだ。

生徒はこう変わる

意見を出し合いながら
学ぶことを楽しめるように



ワークではアーティストが生徒の声をどんどん拾い、発言しやすい空気を醸成。よく聴くことの大切さを実感した生徒も多かった。

生徒同士が話し合つて発表する授業をするなかで感じるのは、「生徒はほかの生徒の発言はけっこうよく聴く」ということだ。他者の見方を受け止め、そこから自分の考えも深めようとする。そんな「人とかかわり合いながら学ぶ力」が、社会に出てからも生きると佐々木先生は考える。

もつとも、今の授業にはまだ課題もあると感じている。グループの話し合いを一步引いて眺める生徒がいる。クラス全体への発言となると怖気づく傾向がある。だから佐々木先生は、年一回は今回のようなワークショップを授業に組み込み、生徒

INTERVIEW

脱線も辞さない活動が、 主体性を引き出すのかもしれない

日野台高校で情報科を教えています。同僚の佐々木先生とは、先生自身が講師をされたアクティブラーニングの研修に参加してからより親しくなりました。情報科の授業でも、生徒たちが班活動をしたうえで発表する形を取っていて、そこが佐々木先生の授業と共通するところかなと思っています。発表するとなると、やることをよく飲み込んで何が重要かを考えないといけません。生徒は目的・やることがわかっているので、結果、主体性をもって学習します。

演劇のワークは1回目と2回目を見学したのですが、印象的だったのは、劇団の方のファシリテーションのうまさと、捏造するあいうえお作文です。奇抜なアイデアもOKだよ、という講師の声に背中を押されて、引っ込み思案の生徒が、意見を主張するという冒険をしていました。生徒の主体性を引き出すには、



情報科でもこうした「脱線も辞さない活動」が大事かもしれない、と思いました。佐々木先生のすごさはその引き出しの多さ。そうしたところも見習っていきたいです。

情報科
中山亨司先生

がチームの中で一步踏み出すことの大切やおもしろさを実感できるような機会を作っていきたいと思っています。

実際、今回のワークショップについて「気づいたことや普段の授業につなげたいと思ったことは」と問うと、生徒たちは次のような声を寄せてくれたのだ。

「わからなくても何かしゃべってみると、誰かが言葉を返してくれてつながった。思ったことを言ってみようと思った」

「アーティストさんたちの言葉で場をあたためようとするさまが勉強になった」

「一人で考えるより、みんなで考えたほうがいい意見が出た！」

「思いついたことは共有する。言わなければ何も始まらない」

今後、佐々木先生としては、生徒が主体的に協働して学ぶことを、ほかの教科の授業や学校行事ともリンクさせてデザインしていきたいと思う。まずは教員同士の理解を深めようと、授業を気軽に見に行きあおうと提案している。

「学校で文武両道というところ、文が授業で、武が部活動や行事と分けて考えがちです。ですが、仕事では知識習得から人間関係の形成まで同時に行うわけで、授業もそれができると思っています。進学や就職に備えるための知識はもちろん、社会や自分のことを考える時に生きる知識も習得し、同時に、リスクを取ることや、人とかかわり合いも授業で学ぶ。そこで身につけたトータル力で、生徒たちには自分の人生を切り拓き、これからの社会を作っていくってほしいです」



授業で生徒につけたい力

	知識	能力	意欲・態度
つけたい力	<p>自分の世界になかった言葉や考え方</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会や人間のことなどを表現・評論した文章を読み、生徒同士で意見や感想も言い合って、自分にとって未知のものの見方を学ぶ <p>文章の論理構造</p> <ul style="list-style-type: none"> さまざまな評論文に共通する基本の論理構造 二項対立や「具体的事柄＝説明」と「一般論(抽象的意味づけ)＝主張」などの関係 	<p>人とかかわり合いながら学ぶ力</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒同士や外部の人と、意見を出したり、質問したり、助けを求めたりと、協働しながら学ぶ <p>自分の考えで物事を批評する力</p> <p>情報を得てアウトプットまでする力</p> <ul style="list-style-type: none"> 小説や評論文について教科書的な注釈を暗記するのではなく、どんな根拠からどのように読めたかを生徒自身がまず考え、発表までする 	<p>リスクを恐れず一步踏み出す姿勢</p> <ul style="list-style-type: none"> 正解がわからなくても、動いてみる、言ってみることで、思考や議論が深まることも少なくないことを、ワークを通して体感する <p>読書を楽しもうとする姿勢</p> <ul style="list-style-type: none"> 小説や評論文をどんな根拠からどう読めたかを自由に考え、共有し、読書でイメージを広げたり思いをめぐらせたりする楽しさを味わう
その力が将来にどう生きる?	<p>世の中の事象への理解が深まる</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会に出て経験を積むほどに、学んできた知識が実体験と結びついて「そういうことか」とわかることが増え、物事への理解が深まる <p>論理的に考え具体的提案につなげられる</p> <ul style="list-style-type: none"> 多様な現象を関連づけ、そこに共通する原因や法則を見抜き、問題解決に向けた提案ができる。また理念を日々の仕事の上で具体的な形にできる 	<p>よりよい社会を築く担い手になれる</p> <ul style="list-style-type: none"> 市民として、職業人として、家族の一員として、まわりと協働し、よりよい社会制度やビジネスモデル、生活環境などを構築していける <p>会議などで自分の意見を表明できる</p> <ul style="list-style-type: none"> 会議の発言や報告書の作成では、調べた情報を伝えるだけでは不十分。その情報から自分がどう考えたかまで発信して、周囲に貢献できる 	<p>自分で人生を切り拓いていける</p> <ul style="list-style-type: none"> 思ったことをやってみて、言ってみて、失敗や予想外の結果からも学ぶことで、人任せではない、自分で選んだ人生を歩んでいける <p>社会の多様性や変化に強くなる</p> <ul style="list-style-type: none"> 紙媒体からネット媒体まで、さまざまなメディアを通して社会の多様性や変化を学ぶことで、自分が受容できる範囲を広げることができる